

## 同仁会診療救護班の医師



中西淳朗 ● 鶴見区

6年ほど前、中国の上海から若きT女史が研究のため来日した。彼女のテーマは「日本の戦前における対中医療・文化活動」で、特に同仁会の研究をしたいということであった。指導教授から、そんなら中西に相談せよということで筆者の下に電話があった。日中共に気に入るような論文を作るのは難しいが、日本での発表を前編とし、本国に向けての論文は後編にして帰国後にしたらとアドバイスした。

と偉そうな話をしたが、同仁会なんて全く知らないといってよい。東大構内にそんな名の食堂があったかなあ一程度である。そこで本郷の古書店に飛んでいって、『同仁会診療防疫班』という本を求めてきて読んだ。

同仁会という組織は、日清戦争後に特に中国における民間の医療衛生業務一切を代行する組織で、当初は在留日本人を対象としていたが、後に「聖人は一視にして同仁」という中国の言葉をもちだして、日本式医療行政を押しつける形になっていった。一言でいえば“アジアにおける医療宣撫工作の組織”であったのである。

前掲の本を開いて口絵写真を見ていて驚いた。上海派遣診療救護班の中に、戦後警友病院医長となった大森周三郎先生（当会初代会長）がいるではないか。頁をくってみると、大森先生は昭和13年4月から同14年1月までの上海第1病院の勤務であるが、帰国後“上海南市皮膚科泌尿器科診療報告”というものを『同仁会医学雑誌』に書いているという。慶応の教室にある論文集にはないのではなかろうか。

そんな訳で、皮膚～泌尿器科医師をこの本の現地機関職員録の項で調査してみた。

青島医専

（※ここは皮と泌が分かれている）

皮膚科学教授 栗本定次郎

泌尿器科学教授 原田 彰

皮膚科講師 西村 英三

北京診療班

皮泌科

佐藤 正市

済南診療班

皮泌科

森川 高弘

南京診療班

皮泌科

小野 茂良

無錫診療防疫班

皮泌科

穴戸仙太郎

以下は省略するが、お年を召した先生ならここに記した方々を御存じであろう。この同仁会は日中戦争がはじまると、その仕事は医学専門学校の運営にまで及んでいる。

この同仁会の活動は、1チームの仕事が円滑に進むように、同一校卒業生で編成している。例えば大森先生のいた上海派遣診療救護班は、慶応が主体となっている。この班に参加させられた看護婦も15名が全員慶応である。筆者は慶応出身であるので、他校の方や他科の方を知らないが、これは仕方がないので、おことわりしておく。

昭和19年6月、ビルマ派遣班が結成された。メンバー表を示しておく。

班長：前田 和三郎（整外科）

植村 操（眼科）

尾崎 繁（内科）

杉浦 楨自（内科）

板橋 剛（外科）

竹ノ内善次郎（産婦人科）

横倉正肆郎（皮泌科）

高橋健二（耳鼻科）

女子班員は看護婦18名、栄養士1名、薬剤師2名

である。

この班の悲劇は、ランゲーン撤退中におこった。前田班長は下腿複雑骨折、看護婦2名は貫通銃創死、負傷者2名であった。

クレージーな時代といってしまうとそれ迄であるが、上のビルマ班の出発時の写真撮影には次の教授が顔を並べている。

加藤 元一 (生理学)

茂木 蔵之助 (外科)

西野 忠次郎 (内科)

小林 六造 (細菌学)

〈まとめ〉

以上に述べてきた如く、初めは外地の日本人居留民に対する診療救護の仕事であったが、昭和10年(1935年)代以降は軍医団の補完的な職務となり、予防活動をも併せて宣撫工作を行った。そこに皮膚科泌尿器科の医師もいたのである。

〈追記〉

原田氏は後に市大皮泌科教授、西村氏は和歌山医大皮膚科教授、小野氏は市大皮泌科助教授、宍戸氏は東北大学泌尿器科教授となった。なお森川氏は東大卒で現地応召医師らしい。

(終)

## 大昔の話

\*

### 老祥樹

吾輩が暎の奥にこの世の明るさをかすかに感じたのは慶応3年(1867年)2月9日(旧1月5日)であった。ずっと後になって知った事ではあるが、吾輩の生れたのは江戸手込馬場下横町(現、東京都新宿区喜久井町)だった。父は夏目小兵衛(直克)50歳、母はちゑ42歳の末っ子だった。父は当時地方名主で馬場下横町周辺を支配していた。母ちゑは実は父の後妻だった。兄弟姉妹は先妻(死亡)の子として姉2人のほかにちゑ(実母)に5人であった。従って吾輩は8番目の子であったが2人の姉は既に死亡していた。吾輩は金之助と名付けられた。父、直克には相当な財産があったらしい。が、士族階級が滅び新旧交替の時代であったので次第に生活も苦しくなったようだ。そこで吾輩は生れると間もなく、母の母乳が出なかった事もある古道具屋夫婦の処に里子に出された。記憶はないが毎晩のように古道具屋のがらくたと一緒に(ぎる)の中に入れて四谷の夜店にさらされていたらしい。そこにたまたま通りかかった姉が吾輩を見付けて、これでは余りに可哀相だと抱いて実家に連れ帰ってくれたそうだ。そんな訳でしばらく実家に居たそうだが、まったく記憶はない。

3歳の頃に、こんどはほんやりと思ひ出せるが養

子になった。養父は塩原昌之助、養母はやすと云った。吾輩はのちのちまでずっと養父母を実の父母と思っていた。養母は吾輩の欲しがる物はなんでも買ってくれた。養父も吾輩がかなりのいたづらをして、騒いだりしても怒る事は殆どなかった。4歳の頃、種痘が原因で疱瘡(天然痘)にかかった。余りに掻きむしったので顔に痘痕が残った。特に鼻の尖端にかなり目立った跡が残った。この跡は生涯気になった。明治7年(1874年)、吾輩は8歳になったので浅草の戸田小学校に入学した。成績が抜群だったせい半年の間に2級ずつ進級した(いわゆる飛び級だった)。その頃に養父に愛人(日根野かつ、未亡人)が出来たので養母との争いが絶えなかった。1年位して養父母が離婚したので吾輩は手込馬場下横町の夏目家に帰った。しかし籍は養子に出された塩原家のままだった。これがのちになって面倒な事になった。

小学校も市ヶ谷小学校に転校した。ここでも学校の成績は抜群で何回となく賞状や賞品を頂いた。「正成論」を書いて甲の点数をもらった。吾輩はよく本を読んだ。内容はよく分らなかったが、やたらとむずかしい漢字が並んでいた。こうして小学校は優秀な成績で卒業(またまた飛び級)し、明治13年

(1880年)に東京府立第一中学校(現、日比谷高校)の正則科第7級乙に入学した。志願者は400名で入学者は120名だった。当時の中学校は「正則」と「変則」に分れていた。「正則」は一般の普通の学問を教え、「変則」は主に英語中心の授業だった。大学予備門に行くには「変則」でなくては受験入学出来なかったので退学したいと思ったが親の許しがなかったので弁当を持って学校へ行くふりをして途中で遊んでいた。漢学は好きだったが英語には余り興味はなかった。月謝は60銭で親が払ってくれた。兄の大助から英語を習ったが、兄は怒りっぽくいつも叱られ、そのうえ吾輩は英語は余り好きでなかったので、兄から英語を教わるのを止めた。2年後に府立第一中学校を退学して二松学舎に入学し、好きな漢文を勉強し、唐詩選や孟子、史記などを好んで読んだ。実母ちゑがこの世を去った。死に目にはあえなかった。吾輩はこの頃、将来は漠然と文学に関する仕事をしたいと考えていた。しかし兄大助から文学は仕事にならないと言われた。西洋からいろいろ文明が入って来た。

そこで吾輩もこの文明開化の時代に漢籍ばかり読んで漢学者になっても仕方がないと思うようになった。そんな訳で吾輩は二松学舎を退学し神田駿河台にあった英語専門学校の成立学舎に通学する事にした。驚いた事に成立学舎は英語専門学校だけに数学、理科など全ての教科書は全て英語だった。吾輩は一大決心のもとに今まで好きで読んだり学んでいた漢籍の本を全て古本屋に売り払い、英語の書物を大量に買いこんだ。大学予備門受験のために必死で英語の勉強に励んだ。そのため自宅を出て小石川にあった新福寺の2階で橋本左五郎<sup>①</sup>と自炊をしながら成立学舎に通った。

下宿代は部屋代、食事代を含めて月2円でまかなった。2、3日おきに他に下宿している人達と牛鍋をつついた。が、なにしろ10銭で買って来た牛肉を7人で食べるのだから大きな鍋に汁をたくさん入れてその中に牛肉を浮かして食べた。ま、今で言う牛しゃぶだろうが、牛肉の量は極めて少なかった。それでも橋本との共同生活は実に楽しいものだった。成立学舎の同級生には橋本の他に太田達人<sup>②</sup>、先輩には新渡戸稲造、本多光太郎などがいた。この成立学舎はのちに私立開成中学校になった。そのうちに東京大学予備門予科の入試が迫って来た。漢学には

強かったが当時は吾輩は数学が不得意だった。入学試験問題に出た代数がむずかしくて困ったが、隣の橋本にそっと教えてもらってやっと合格した。吾輩に教えてくれた橋本が不合格だったのには驚いた。彼は「くだらん」と一言云って札幌農学校へ入学してしまった。

しかし追試の結果、橋本も合格して予備門予科に戻って来た。明治17年(1884年)、18歳になった吾輩は予備門予科に通う事になった。

月謝は25銭だった。予備門予科で成立学舎の出身者が中心になって「十人会」を作ったので吾輩も入会する事にした。「十人会」には柴野(中村)是公<sup>③</sup>、太田、橋本も入会した。

吾輩は予科に入学したものの余り勉強もしないで水泳、ボート、乗馬、野球などに興じ、寄席にもよく行った。同級生には芳賀矢一<sup>④</sup>、正木直彦(のち美術学校長)、福原鎌二郎(のち文部省専門学校事務局長で吾輩の博士問題の騒動にかかわる)、水野繁太郎(のち外国語学校校長)、平岡定太郎(のち樺太庁長官)などがいた。

正岡子規<sup>⑤</sup>もこの年に入学した。吾輩と彼との関係はのち程また語らなければなるまい。

秋になって汁粉の食べ過ぎのせいと思われるが吾輩は盲腸になり一時実家で静養した。

しかし間もなく全快し、神田猿楽町にあった末富屋に是公(中村)、橋本ら10人位と下宿して学校に通う事にした。下宿代は月5円程だった。大学予備門の第2学期の成績は116人中27番だったと思う。不合格者は40名だった。

吾輩は大学予備門に入学すると不得意だった数学を重点的に勉強したので代数の点数は93点もあった。やれば出来るものだと思った。

明治19年(1886年)、吾輩は20歳になった。大学予備門は第一高等中学校(旧制一高)と改められた。予科3年、本科2年となった。この頃吾輩は腹膜炎にかかり進級試験を受ける事が出来なかった。また成績も全体的に悪かったのだろう、橋本、中村らと共に落第してしまった。が、実際には学制改革などで学校はごたごたしていた。そのため吾輩が追試を受けようとしても教務係の事務員が忙しくて追試の申請をとり合ってくれなかった。そこで吾輩は考えた。追試の申請をとり合ってくれなかったのは吾輩に信用がないためだ。信用がなければ世の中に出てもなに1つ

出来ない。人から信用を得るには勉強しなければならない。いっそ初めからやり直そうと考えた。またこの落第を機に実家から学費を貰いづらくなった。

そこで中村と2人で江藤義塾の教師になり、午後2時間ばかり幾何と英語を教えながら大学予備門に通学する事にした。月給は5円だった。中村と吾輩は共同生活し、月給は共同財産として必要経費（学費、食費、湯銭など）は別にしておき、残った金で寿司、汁粉、そばなどを食べ歩き、また寄席にもよく通った。

金がなくなると我々は外出しなかった。米山保三郎<sup>⑧</sup>、菊池謙三郎<sup>⑨</sup>、正岡子規などと知り合ったのもこの頃だった。たまたま中村がボートレースで優勝して学校から賞金を貰った。

彼はその賞金でシェイクスピアの『ハムレット』とアーノルドの論文を買ってくれた。初めてこの時『ハムレット』を読んだが、十分に理解し読みこなす事は出来なかった。が、この『ハムレット』はのちのちまで大切に保存しておいた。夜は落ち着いて勉強する事が出来た。1年間程こうした生活が続いたが、急性トラコーマにかかってしまった。実父が心配したので塾を辞めて実家に戻った。明治20年（1887年）の事だった。

この年に長兄大助、次兄直則が相次いで肺結核で死亡した。家督相続の問題から実父が心配して吾輩が幼時の時養子となった塩原姓から夏目姓に変えるため塩原家と交渉に入った。結局家督相続は三男直矩に決った。しかし明治21年（1888年）、吾輩が22歳の時に塩原姓から夏目姓に復籍する事になり、夏目金之助となった。

この時に吾輩は塩原昌之助（養父）に「養育料として240円を実父よりお受けとり下さい。私は夏目姓に戻りますが、お互に不実不人情にならないようにしたいと思います」と言うような一札を書かされた。この一札がのちのちまで吾輩を苦しめる事になった。この年の7月に大学予科を卒業した。首席だった。

本科に進むにあたって吾輩は趣味を伴った職業につきたかった。また世間に必要な職業でなければならないと思った。まず医者が考えられたがどうも吾輩は医者には適さないと思ったし医者になる気もなかった。次いで建築家はどうかろうと思った。ところが同級生の米山保三郎（天然居士）が吾輩に「建

築より文学の方がこれからは生命<sup>いのち</sup>がある。のちのち後世まで名が残る」と言った。

彼自身は空間論を研究しており、吾輩は大いに彼を敬服していたので彼の言葉に感激し、文科に進む事にした。惜しい事に米山は彼自身が留学直前に病死してしまった。そんな訳で吾輩は文科、それも英文科に決めて、英語、英文に通達し外国語で文学上の述作をやって西洋人を驚かせようとも思った。英文科に進んだのは吾輩1人だった。子規と親しく交際するようになったのはこの頃からだった。

彼とは以前から顔は知っていたが余り話した事はなかった。子規と親しくなったきっかけは寄席だった。彼は大いに寄席通だった。

吾輩もまた寄席は大好きだった。日本橋の寄席に2人でよく通った。子規は哲学をやりたいと思っていたらしいが、詩文に興味があり次第に詩歌や小説に情熱が向けられるようになった。彼は漢詩、和歌、俳句、俳文などを書いてまとめて『七草集』と題をつけて吾輩に読めと推<sup>すす</sup>めた。吾輩は『七草集』を読んで、子規は悠々と風流を楽しんでいるのに吾輩は学業に追われている気持を九首の七言絶句に記し、『七草集』を評した。この頃に東海道線、新橋―神戸間が開通した。1番列車は新橋午前6時10分発、京都に午後11時20分に着いた。4番列車は新橋午後4時45分発、翌日午後12時50分に神戸着の夜行列車だった。1日1往復、片道約20時間で料金は下等3円76銭だった。

この年の夏に友人達と箱根、房総半島を旅行して紀行文と漢詩をまとめて『木屑録』を書いた。この『木屑録』は子規の『七草集』に刺激されて吾輩が他人に見せるために書いた初めての文章であった。署名は「漱石」とした。この『木屑録』を嗜血したあと郷里松山に帰り静養中の子規に送った。またこの文集はのちに昭和7年（1932年）12月に岩波書店より発行された。6円50銭だった。

子規はこの『木屑録』を読んで吾輩の事を極めて誉めたたえてくれた。彼曰く「兄は外国語に長じ、まるで日本語のように話す。自分がかねがね西洋の事に長じた者は東洋の事は知らないで、兄も和漢の学を知らないだろうと思っていた。ところがこの詩文を読んで兄が天才であることが分かった。兄のような人は100万人に1人しかいない」そんなわけでこれまで以上に吾輩は子規とますます親しくなった。

明治23年（1890年）、24歳になった。吾輩は帝国大学文科大学英文科に入学し、文部省貸費生となった。貸費は年額85円で月7円で授業料、書籍費その他をまかなった。文科大学の上級生には立花政樹<sup>⑧</sup>、狩野享吉<sup>⑨</sup>、藤代禎輔<sup>⑩</sup>、菅虎雄<sup>⑪</sup>らがいたが、英文科は立花のみで、英文科に入学したのは吾輩が2人目であった。主任教授はディクソン<sup>⑫</sup>であった。

この年に全国的にコレラが流行し患者数は4万人に達し、2,800名が死亡した。また帝国ホテルが開業した。更に第1回衆議院選挙が行われたが、勿論吾輩には選挙権はなかった。

選挙権は直接国税15円納入者で25歳以上、被選挙権は30歳以上の者に限られていた。また現役軍人、華族の当主は選挙権、被選挙権はなく、神官、僧侶、教師には被選挙権はなかった。我が国の人口は4,000万人、有権者は405万人だった。

大学ではディクソンから詩や文章を読まされた。試験問題は英文学と全く関係ない問題ばかりだった。そんな訳で吾輩は自分で英文学を理解しようと図書館に通ったが、余り手がかりは得られなかった。英文学に関する書物もまだ殆どなかった。その頃吾輩は目に違和感を感じて神田の井上眼科に毎日のように通院していた。その井上眼科で以前より心を惹かれていた細面の美しい娘に突然会って驚いた。吾輩はさっそく松山で静養していた子規に報告の手紙を出した。同時に子規に試験の点数が足りないので追試験を受けないと落第する旨も知らせた。森鷗外<sup>⑬</sup>の処女作『舞姫』、『うたかたの記』を読んだので子規に鷗外の作品を褒めたら彼に叱られた。夏には中村是公、山川信次郎<sup>⑭</sup>と富士山に登った。これは2回目である。

敬愛していた嫂が死んだ。非常に悲しかった。また主任教授ディクソンに頼まれて鴨長明の『方丈記』の英訳とその解説を書いた。翌年ディクソンは吾輩の翻訳した原稿をもとに講義した。東北の上野一青森間が全通した。1日1往復で約26時間半かかるそうだ。

明治25年（1892年）、吾輩は26歳になった。子規が落第しそうになったので追試を受けるように伝えた。吾輩は東京専門学校（現早稲田大学）で週2回教える事にした。夏休みを利用して松山に帰る子規と一緒に京都、大阪、堺を初めて訪れた。京都では柵屋<sup>ひいらぎや</sup>に泊まり、京の夜景を楽しみ、比叡山<sup>ひえいざん</sup>にも登った。

子規と別れたあと尾道から松山に渡り再び子規に会った。松山では城戸屋に宿を決めて、毎日のように子規宅を訪問、そこで初めて高浜虚子<sup>⑮</sup>に会った。

ついに子規は学年試験に落第して彼は大学を退学する事を決意した。松山から子規と一緒に東京に帰り、子規に誘われて坪内逍遙を訪問した。萩が見事だった事を覚えている。吾輩が編集委員をやっていた『哲学雑誌』に無著名でイギリスのホイットマンに関する論文を初めて発表した。

この論文はそれなりの評価を得た。吾輩はホイットマンの詩が好きだ。秋になると子規は帝国大学文科大学を正式に退学してしまった。残念だが仕方がない。吾輩が講義していた東京専門学校での評判が良くないと知らされたがなぜか分らなかった。坪内逍遙に出講を断る手紙を書いた。暮になって『中等教育改良策』を書いた。

明治26年（1893年）、27歳になった。吾輩は英文学談話会で「英国詩人の天地山川に対する観念」と題して講演した。かなりの注目を浴びたようだった。のちに『哲学雑誌』に連載してかなりの評価を得た。これが吾輩が大学時代に書いた最後の論文である。夏になって吾輩は帝国大学文科大学英文科第2回生として卒業した。英文科卒業生は吾輩1人で、英文科専攻の学生としては立花政樹について2人目である。中村是公は法科大学を、米山保三郎は文科大学哲学科を卒業した。吾輩は帝国大学大学院に進み、神田乃武、ウッドから指導を受ける事になり、『英国小説一般』と言う題目のもとに18世紀のイギリス小説を読む事になった。しかし英文学への自信は余りなかった。大学院で小屋（大塚）保治<sup>⑯</sup>と知り合った。

彼とはのちのちまで付き合う事になり、また彼によく世話になった。夏になり寄宿舎に移り10数人と一緒に暮した。文学士の就職に関し前途に不安を覚えたのもこの頃である。寄宿舎の隣室にはのちの首相で暗殺された浜口雄幸が一級下で居た。明治20年～24年の5年間で東京大学、帝国大学を卒業した学士の総数は1583名（年平均300名）であった。意外に吾輩の就職口はいろいろあった。吾輩は東京高等師範学校（のち東京教育大学、現、筑波大学）に決めた。手当は年に450円、月給にすると37円50銭だったがそのうちから貸費返却7円50銭、実父への送金10円、そのほか建監費として1割が引かれ、手取

りは16円25銭だった。米一升10銭だったので相当な高給取りだったのかも知れない。狩野享吉から金沢の名菓が届き寄宿内でみんなで食べた。臍げながら吾輩はどうも教職には向いていないのではないかと感じはじめていた。

明治27年（1894年）、28歳になった。風邪を引いたあと喉を痛め血痰が出たので医者に診てもらった。肺結核を心配したが結核菌は検出されなかった。しかし兄2人が肺結核で死んでいるので心配した。自覚症状もなくなったので栄養を摂り、適当に運動を行い、気楽に過ごすことにした。自然に軽快治癒した。日清戦争がはじまった。夏に伊香保、松島など東北地方を旅した。勉強もしようと洋書を携えたが余り本は読まなかった。しばらく小石川にあった菅虎雄の新居に下宿していたが秋になり伝通院脇の尼寺法蔵に下宿を変えた。最近どうも吾輩は神経がよくない。神経衰弱ではないかと思うようになった。幻想や妄想に襲われる事もある。不安になる事もある。そこで菅虎雄の紹介状を持って鎌倉円覚寺の帰源院に釈宗活を訪ね、禅僧釈宗演のもとで禅の修業をする事にした。2週間ほど修業したが勿論、悟りは得られなかった。この時の経験は後年、小説『門』に書いた。

明治28年（1895年）、29歳になった。鎌倉の円覚寺での参禅を終り帰京したのち「ジャパン・メール」の記者になろうとして「禅」についての英語の論文を提出したが採用されなかった。

不採用の理由も説明もなかったので吾輩は大いに腹を立て、仲介の労をとってくれた菅虎雄の目の前で書いた論文を破り捨てた。子規は病弱ではあったが「日本」の従軍記者として新橋駅から広島にむかった。吾輩も高浜虚子らと見送った。小屋（大塚）保治と大塚楠緒子の結婚式に兄の袴を貸りて出席した。小屋はその後大塚姓になった。菊池謙三郎から山口高等学校に来ないかと招聘されたが、思うところがあり愛媛県尋常中学校（旧松山中学、現県立松山東高等学校）に行きたいと思っていたので断りの手紙を書いた。吾輩はこの頃文学や人生の先行きに悩んでいた事は事実である。

これらの悩みから抜け出たく田舎を選んだ。東京高等師範学校と東京専門学校を辞めて新天地の松山に赴いた。菅虎雄の口添えもあった。帝国大学総長浜尾新の推薦もあった。

松山中学の校長は住田昇でのちに山口高等商業学校の校長になった。学士は吾輩（文学士）と教頭の横地石太郎（理学士）だけだった。4月に松山市に着き城戸屋の「竹の間」に案内された。そのあと新館の大きな部屋（15畳）に移った（現在は「坊っちゃんの間」と残されてある）。城戸屋には3年前に松山に来た時にも泊まった。吾輩の月給は80円だった。校長は60円だったので校長より20円多かった。これは破格と言ってよかった。ちなみに他の英語教師は40円、数学教師は35円、体育教師は12円、書記も12円、また吾輩と同時に赴任した同志社出身の弘中又一君は20円だった。生徒には吾輩ののちの主治医となった真鍋嘉一郎<sup>®</sup>（級長）、松根東洋城<sup>®</sup>、翌年には安倍能成<sup>®</sup>が入学して来た。田舎だったので生活費は余りかからなかった。城戸屋を出たのち、学校へは20分位かかったが骨董商（いか銀）に下宿した。早速道後温泉に行ってみた。道後温泉は立派な建物で8銭出すと3階の間でお茶とお菓子が出た。湯に入ると頭まで石鹸で洗ってくれた。松山で吾輩に縁談の話があった。相手の女性は軍人の娘だった。しかし、いろいろ考えた末に断る事にした。そのうち同僚の世話で松山の豪商の番頭の離れ座敷に下宿を変えた。2階が6畳と3畳、階下が6畳と4畳半で、窓から見える松山城の天守閣は素晴らしかった。退屈な日々が続いていたので、学校の図書室から陶淵明の本を借りて読んでいたら教頭が英語の先生が漢詩に興味を持つなんてと驚いていた。

子規に会いたかった。子規は日清戦争の従軍記者として戦地に赴いていたが、戦地には行かないで日本へ帰る途中で咯血し神戸の病院に入院したと連絡があった。高浜虚子が見舞に行った。その後子規は病院を退院して須磨保養所で療養生活を送っていたが夏の末に松山に帰って来た。松山に来ると子規は吾輩の下宿にころがりこんで来た。吾輩は大いに喜んで彼に小遣いを与えたり、病弱だったのでいろいろの御馳走をとり寄せて食べさせた。次第に子規も元気になり、彼の処には新俳句に惹かれて松山の門下生がぞくぞく集まるようになった。朝から熱心な句会が始まった。初めは吾輩は余りに熱心な句会が騒々しく勉強も出来なかった。が、そのうちに吾輩も進んで句会の仲間として加わる事にした。子規には客観性を重視し写生の句を作るように教えられた。これが吾輩をして、言いたい事を自由に表現し

たい気持ちを高ぶらせた。将来の創作の芽がこの時生れたように思う。

吾輩は俳句に夢中になり、子規と郊外を散歩したのち32句も作った事もあった。松山高等小学校の教頭が結成し子規が中心だった「松風会」にも入会した。この年の秋に急に子規は帰京したいと言い出したので「松風会」の会員は大いに慌てたが子規の決意は固かった。またこの頃に松山中学校校長排斥のストライキが起った。理由は不明だ。子規の上京送別会が開催された時に吾輩は1句を詠んだ。その1句に出席者一同は非常に感心した。その句は「御立ちやるか御立ちやれ新酒菊の花」。子規は広島を経て須磨、大阪、奈良などに遊んで10月末に東京に着いたようだ。旅費などは吾輩が工面した。

突然吾輩に見合い写真が送られて来た。貴族院書記官長中根重一の娘の鏡だった。彼女は19歳だった。見合い写真を見て鏡になんとなく好感をもった。暮も押しつまった28日に見合いのため吾輩は上京した。虎ノ門の貴族院書記官長舎の2階で中根鏡と見合いをした。鏡はたいした美人でもなく、歯並びもよくない印象を持った。が、そんな自分を隠さない鏡をなんとなく気に入った。結婚してもよいと思った。そこで婚約が成立した。

大晦日に吾輩は子規を見舞った。子規はそこで次の句を詠んだ。「漱石が来て虚子が来て大三十日」。こうして吾輩は東京でその年を越した。同時に東京に戻りたいと切に感じた。

翌年、松山中学校を辞し、熊本の第5高等学校(旧制五高、現熊本大学)に赴任するなどとは思ってもみなかった。

(つづく)

#### 注 人名

- ① 橋本左五郎 吾輩の昔からの友人。のち東北大学教授。
- ② 太田達人 東京帝大物理科卒。秋田中学、樺太の豊原中学の校長になる。
- ③ 中村是公(旧姓、柴野) 東京帝大法科卒。吾輩の終生の友人。大蔵省に入る。後藤新平の信任厚く、満鉄副総裁を経て総裁になる。大正6年(1917年)貴族院議員に勅撰され鉄道院総裁になる。東京市長に選ばれ関東大震災の復興に尽力した。生涯独身で文学とは一切無縁の人。

- ④ 芳賀矢一 東京帝大国文科卒。文学攻究法研究のためドイツ留学したのち東京帝大教授。国文学の基礎を築いた。国文学者、文学博士。
- ⑤ 正岡子規 松山中学を中退し大学予備門に入学。東京帝大国文科に入学したが中退。俳句に没頭。35歳でカリエス(結核)で死亡。
- ⑥ 米山保三郎(天然居士) 東京帝大文科哲学科卒。吾輩の将来を決定させた人物。留学直前に死亡。
- ⑦ 菊池謙三郎 東京帝大国史科卒。吾輩の同窓生。文部省に勤務したのち山口高校、津山中学、千葉中学の教師を経て二高校長(現東北大学)。
- ⑧ 立花政樹 東京帝大英文科卒。1回生。吾輩の2年先輩。吾輩は3回生で彼に次いで2人目(英文科)である。
- ⑨ 狩野享吉 東京帝大数学科卒のあと哲学科を卒業し、大学院では数学を専攻。吾輩が兄事した先輩。いろいろ世話になった。四高教授、一高校長など務めたのち京都帝大文学科大学の初代学長。生涯独身で78歳で日大病院の大部屋で誰ひとり看取る者なく死去。哲学者。教育者。文学博士。
- ⑩ 藤代禎輔 東京帝大独文科卒。吾輩の大学時代からの友人。一高教授、京都帝大講師、同教授を歴任。吾輩と同じ船で留学生としてドイツに留学。独文学者。
- ⑪ 菅虎雄 東京帝大独文科卒。吾輩の大学時代からの友人で極めて親しかった。旧制五高、三高、一高の教授を歴任。吾輩の生涯の転機にはしばしば彼が現われた。松山中学、五高赴任の時、また吾輩が留学したのち一高講師になったのも彼の世話によった。
- ⑫ デイクソン スコットランド生れ。明治19年から25年(1886~92年)まで東京帝大文科大学で英語、英文学を講じた。吾輩は彼の依頼で『方丈記』を英訳した。
- ⑬ 森鷗外 東京帝大医学部卒。直ちに陸軍に入り当時最年少の医学士。ドイツに官費留学のち軍医総監になる。小説家。評論家。衛生学者。
- ⑭ 山川次郎 吾輩の東京予備門(旧一高)の同級生。大学進学に失敗して大学では1年後輩。吾輩が五高に招いたのち一高教授になる。英文学者。
- ⑮ 高浜虚子 松山中学に入学したのち京都第三高等学校に入学し、仙台第二高等学校に転校したが退学。子規から俳句の指導を受け、子規の後継者に

なる。『ホトトギス』を刊行した。この『ホトトギス』に「吾輩は猫である」が連載され吾輩は一躍有名になる。俳人。小説家。

- ⑯ 大塚保治（旧姓、小屋） 東京帝大哲学科卒。大学院に進む。吾輩の2年先輩で寄宿舎が同じだった。大塚楠緒子と結婚し大塚姓となる。ドイツ留学後東京帝大美術講座の初代教授、吾輩の就職の世話を狩野享吉と一緒によくしてくれた。美学者。
- ⑰ 真鍋嘉一郎 のちに東京帝大医学部教授。吾輩の

晩年の主治医。

- ⑱ 松根東洋城 京都帝大法学部卒、宮内省式部官。書記官。帝室会計審査官。俳句を通じて吾輩の門下生になる。謡も彼と楽しんだ。俳人。
- ⑲ 安倍能成 東京帝大哲学科卒。日蓮宗大学、法政大学、旧制一高に勤め、京城大学教授。文部大臣のち学習院院長。「朝日文芸欄」で活躍。夫人は華厳滝で自殺した藤村操（当時一高生）の妹。哲学者。評論家。

## おどろきモモの木クリニック・パートⅩ



宮本秀明●神奈川県立がんセンター皮膚科部長

### 1. タマちゃん

ちはやぶる 誰もが知らぬ 帷子川  
餌くれないで 記事作るとは

「かたびらがわ」と読めない人が多かったが、タマちゃんのお蔭で読める人が増えた。小生は子供の時から読めた。何故なら、通っていた保土ヶ谷区内の中学の横をもこの川が流れていたのである。しかし「住民登録」するとは悪ノリしすぎである。「獣眠登録」というべきか。ところで住基ネットにはつないだのだろうか。また、西区に出現したから「西タマオ」という命名も安直である。緑区や青葉区だったら「緑タマオ」や「青タマオ」になるのだろうか。それなら金沢区だったらどう呼ぶんだ。南区に中村川があるが、ここに現れたら「中村タマオ」か？

そうこう言っているうちにタマちゃんは横浜を離れ、埼玉の中川という平凡な名の川に移動した。カメラで顔をアップするとおメメのそばに釣り針が刺さっていて、痛々しい。これがほんとの「タマに傷」か。などと考えていたら今度は白装束団体の出現である。そしたらすっかり姿を見せなくなった。

たまにしか現れないからタマちゃん、てか。

今度は利根川に別人いや別アザラシの「トネちゃん」なんてのも現れたので、タマちゃんのスターの座も磐石ではない。

### 2. ビューティフルスカイラーク

ファミレスではない。「美空ひばり」のことである。「レッツゴー」は「吉 幾三」である。

### 3. いやし系

一昔前は「カワイイ」タイプのアイドルが多かったが、最近は少し風向きが違ってきた。ある日テレビ欄に釣られて「癒やし系巨乳ギャル総出演」なる番組をつけて見ると薄汚く茶髪にした女達が無理やり谷間を見せて蠢いている。「癒やし系」というより「もやし系」か「肥やし系」である。馬鹿ばかりなのですぐに消してしまった。

「巨乳」だの「爆裂乳」だのドギツイ言葉が流行り「ポイン」と言っていた頃が懐かしい、と思っていたら今度は「スイカップ女子アナ」の登場である。この女子アナの出身地の山形県尾花沢市がスイカの産地だったので命名されたようだが多分にこじ付け



がましい。小生はかつて山形に5年5ヶ月間住んだが、その間にスイカップ美女にはお目にかからなかった。かえすがえすも無念であり、「青春を返せ」と叫びたくなるほどである。

山形新幹線には「さくらんぼ東根」という舌を噛みそうな名前の駅があるが「スイカップ××」なんて駅を追加したらどうだろうか。「幸福駅」「愛国駅」「銭箱駅」「福生駅」を上回る人気となるかも知れない。JR東日本、増収間違いなし！

#### 4. 余生

だいぶくたびれてきたのでそろそろ隠居、というより隠遁したくなった。人里離れた山の中に引っ込む手もあるが、山中は藪蚊が出そうだし蝮まむしに咬まれそうでもあるし冬は雪が降ったりして寒そうである。小生は雪国も寒いところも充分懲りている。

そこで思いついたのが潜水艦での生活である。昔見たジュール・ベルヌ原作の『海底二万哩』という映画では何ヶ月も潜り続けて大海を周遊していた。あのような潜水艦は実際には無いにしても海中深く潜ってしまえば台風が来ようが不審船が近づこうがへっちゃらであるし、日焼けもしないから皮膚癌の発生も防げる。人と顔を合わせなくてもいい。しかし何年か前に起きたロシア艦みたいに2度と浮上出来なくなったらどうするか。どうせ世を捨てた身である。海面に上がってこれなけりゃ葬式も黙祷くらいで簡単に済むし、けっこう毛だらけ、猫灰だらけだわい。しかし息苦しそうなのが少々辛い。

#### 5. 英語狂育法 その1

「I go to Tokyoを過去形にしなさい」という問いに対する某高校生の解答は「I go to Edo」だったそう。採点結果は×ではなく、△だったそうである。

#### 6. 乙女の悩み

中学生の長女が2日ほど前から「おっばいが痒いの」というので「お母さんに相談しな」と答えたところ妻から「おっばいが大きくなる前触れよ」と言われたらしく喜んでいて。でも状態はよくなりず、再び相談してきた。よく聞けば痒いのは片方だけだという。「片チチだけ小池栄子になる訳ないじゃん。パパリンに見せてみな」と言っても「恥ずかしいよー」と防備は固い。しかし耐え切れずに遂に見せた

アップルパイならぬニップルパイは典型的な湿疹だった。数日のステロイド外用で治ったようだ。

#### 7. 英語狂育法 その2

長女が学校から持ち帰った英語教材では、日本昔話の「かちかち山」は「Click Click Mountain」と訳されており、タヌキの薪にウサギが火をつける際の擬音も「Click Click」になっている。数年前にパソコン初心者をも悩ませた「クリック」は「カチ、カチ」だったのだ。

#### 8. パソコン用語の摩訶不思議

パソコン用語には意味がわからぬまま英語を直訳したものが多く、解説書の作成者のオツムが知れる。以下は自分なりの解釈も混じるが、「ケーブル」→「コード」、「アプリケーション」→「プログラムシステム」、「マニュアル」→「手引書」（小生の愛車はマニュアルシフトであるが）、「インストール」→「機能追加」、「フォルダ」→「書類棚」、「フォント」→「書体」というように→の意味にたどり着く前にイライラが随分溜まったものだ。そもそも、ペンネームとかニックネームと言えはわかるのに「ハンドルネーム」といい、ガイド・手順と言えはいいのに「ウィザード」などというから訳がわからなくなるのだ。

それから腹が立つのは画面の端にある「ヘルプ」である。困った時ここを押しても見慣れない単語がさらに羅列されるだけで役に立った例がない。

#### 9. 高速道路の造り方

高速道路での事故は悲惨である。実際に走ってみると、合図なしの急な車線変更や車間を詰めたり、サーキットと間違えてるのではないかと思えるほどの猛スピードで無茶苦茶な運転をする者が多数いる。病院に早く着いたところで美人ナースが微笑んで迎えてくれるわけではないので、小生は常に安全運転である。彼らはそんなに急いで仕事場に着くと楽しい事が待っているのだろうか。第一、命が惜しくないのだろうか。小生は事故による渋滞に遭遇するのも嫌だが、巻き込まれて死ぬのは断じて御免蒙りたい。

政府は無駄な高速道路ばかり造っている、という批判が巷にはあり、ガラガラの道路も確かに存在す

る。そこでニューアイデアだが、高速道路を同じコースに「死んでもいい人用」「絶対死にたくない人用」の2種に分けて建設したらどうだろうか。これを採用していたら、某大臣と喧嘩した某総裁も国民の支持を受けていた事うけあいである。

## 10. 近未来の救世主は？

喫煙習慣に染まっていく若者があとを絶たないのに政府は積極的な政策を執るでもない。その気になれば事は簡単である。例えばハンサムな俳優をコマーシャルに使わず、頭のはげた目つきの悪いフォーク歌手崩れの俳優をくわえタバコで登場させ「吸っているとロクなことねえぞ、ザマミロ」とやるだけでも若年層の喫煙者は減るだろうが、そうしないのは単にタバコ栽培農家の圧力が怖いだけではなからう。

日本も少子化が進み少数の若者が多数の老人を支える構図が進展する。タバコに害があるとはいえ50

歳代までは心筋梗塞にしても癌にしても持ちこたえる人が多い。これらの疾病の治療に一時的に金がかかるとしても年金受給年齢にたどり着かなきゃ、政府の丸儲けである。

ここ1～2年間の外国への対応を見ても政府というものは国を守るものであっても必ずしも国民を守るわけではない事が良くわかったが、普段碌でもないことしかしてないのに「国民を守る義務がある」などとぬかす輩が多数いるのも不愉快だ。某球団が優勝したことに託<sup>かこつ</sup>けて警官の制止を振り切ってどぶ川に飛び込んだり、よその店の看板を平気でぶち壊したりする連中を見るにつけ、そういう思いを強くする。ヒトの寿命なんてDNAで予め制限されているのだろうが、制限内を最大限生き抜くには自分で身を守らねばならぬ。そして若い時稼いだ分の見返りを期待したい。しかしそうは問屋が卸すまい。借金だらけの政府は、善良な国民の財産をそのうち60年ぶりにまたがっばり吸い取ってしまうだろう。

